第一日目（午後の部）

第Ⅱ部　報告

劉　東波

大会第一日目午前の部と午後の部の間に、一時間の昼食休憩が挟まれた。ロシアの大学は既に九月から新学期が始まっているため、大学の昼休みと重なった。校舎二階にあるカフェと自販機が大混雑であったため、多くの参加者は学生食堂へ足を運んだ。注文するのは一苦労であった。ほぼ「指差し注文」と「電卓会計」となったが、現地の学生を交えながら学食を食べるのは楽しかった。

大会第一日目の午後は、二つの部に分けられている。二本の個人発表から構成された第Ⅱ部と、小特集②「芥川龍之介の社会認識」とが組まれた。第Ⅱ部の司会者は馮海鷹氏（中国・清華大学）である。

はじめに、柴田希氏（早稲田大学・非常勤）により「映画の〈仮感〉―芥川龍之介「片恋」「影」論」と題して個人発表①が行われた。柴田氏は、芥川が「我鬼窟日録」で述べている「写真―現実―仮感―芸術」という概念を手がかりに、「片恋」と「影」の二作品を取り上げ、映画の芸術性に対する芥川の態度に迫ろうとした。まずは「実感」と「仮感」の二つの概念に対する理解から論を展開し、映画から得られる「仮感」から「純粋なる概念的実在」へ昇華すると「芸術に至る」と述べた。次に「片恋」における「僕」と「お徳」の言説から、「実感」と「仮感」の対立構造を分析した。最後に「影」における「〈映画的〉要素」を検討し、作品から「映画に関する理知的な批判」を読み取り、両作品は「文化史的な意義」を持つテクストだという評価を与えた。質疑応答では、司会者のコメントをはじめ、松本常彦氏（九州大学）、金香花氏（大阪大学大学院）から発言があり、活発な意見交換が行われた。

次に、村山麗氏（上智大学大学院）により「芥川龍之介

「二つの手紙」「影」考―神経症をめぐって」と題して個発表②が行われた。村山氏は、芥川文学における「ドッペルゲンガー」に関わる諸説を整理し、「二つの手紙」と「影」二作品が持つ固有の問題性を考察した。登場人物を「神経症」の観点から分析し、「夫」が「自己本位の論理を遂行する」時、「都合のいい記号」として、「ヒステリー」や「神経衰弱」などの神経症が作中で機能していると述べた。質疑応答で、松本常彦氏と発表者が「二重人格」と「ドッペルゲンガー」について行った意見交換は印象的であった。また、五島慶一氏（熊本県立大学）から、論の進め方、「論争」の扱い方などについてコメントがあった。最後に、司会者からの指摘も交えながら発表が終わった。有意義な質疑応答になった。